

## 名塚紘一「自分史」への応答

名塚 紘一\*・徳本 達夫\*\*

A Response to the NAZUKA Kouichi's Personal History

Kouichi NAZUKA\* and Tatsuo TOKUMOTO\*\*

「独白や口承を文字化することによって、人は自分を相対化し、自分以外の人生を生きる他者や世界を発見し、人たることの深遠な意味に到達する。」  
——色川大吉<sup>1)</sup>

### はじめに

小文は、筆者らの「大学教育考」<sup>2)</sup>を承けている。座談会形式の上記報告においては、民主主義の根幹に関わる名塚会員の壮絶な人生の一端も語られた。名塚会員の自分史(資料1)は続編である。質疑応答(資料2)によって追記が得られた。記名以外の文責は徳本にある。

註1) 色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』(中央公論社、1975年、374頁)。後なる者へ遺す自分史は、在野の歴史家色川大吉が作品を著わし、ブームとなった。  
2) 名塚紘一・徳本達夫「大学教育考—「はぐくみ」報告2018への応答」(『広島文教教育』第35巻2020年所収)。講壇的な発言とは違って、体験に裏打ちされた名塚発言は迫力があつた。徳本は別途、名塚会員に人生の一端を後学のために綴ることを願った。今回、約2.5万字超の自分史が届いた。教育関係以外の分野からの刺激的な記録である。79歳の時点での作品。貴重な体験を江湖にお示し下さいとお願いした徳本の懇慫に答えて下さった。

### 1. 名塚紘一「自分史」を綴る

自分史は社会史と連動している。それはまた、国家が策定する国家史とは違った側面を持つ。名塚「自分史」もその一例である。体験に裏打ちされた、時代史も絡めた作品である。

### 資料1. 名塚紘一「自分史」

2021年2月4日、今日から書き始める。

#### 1. 誕生 1942年(昭和17)台湾高雄州旗山郡美

\* 元本学施設警備員

\*\* 元本学教員

濃庄に生まれる。著名人に薦められ、紘一と命名された。由来は「八紘一宇」。全世界をひとつの家のように統一するという、大日本帝国の植民地政策、侵略戦争という当時の世相を反映する名前だ。自分ながら嫌な名前だ。父名塚貞夫、母キミノの次男、4人目として誕生した。生まれた時、父は出兵中(南方のどこかの島、聞いたことはあるが、忘れた)。父の出生地は神奈川県横浜市。爺さんの職業は警察署長だったらしい。八の字の口髭を生やし、サーベルを片手にした正装姿を写真で何度か見たことがある。父も台湾電力の所長をしていた。母は熊本県天草郡有明町の農家の二女? 誰かの紹介で写真、住所を頼りに台湾まで行ったとのこと。驚き。無謀というか、大した度胸だ。当時の政権が植民地政策(吉田松陰や福沢諭吉)の考えをもとに進めたもので、国内外を不幸にした。私たちもその犠牲か?

平成30年1月13日毎日新聞に、映画監督伊丹万作(伊丹十三の父)が『映画春秋』創刊号(昭和46年8月号)に書いた記事が紹介されていた。有名な一節。「多くの人が今度の戦争で騙されたと言う。だます者だけで戦争は起こらない、あんなに造作なく騙されるほど判断力を失い、思考力を失い、信念を失い自己のいっさいをゆだねるようになった、国民全体の文化的無気力、無自覚、無責任等が悪の本体なのである。「騙されていた」といって平気でいられる国民なら、おそらく今後とも何度でも騙されるであろう。」

正に今がその時。安倍自公政権、国会で118回(その後も)嘘の答弁。黒を白と言いくるめる。そうさせないために何をすればよいか? 政治への関心を失わず暮らしと直結させて考える。格差社会や性差別の現実を見て、権利や自由を縛らせない。SNSでなく、本を読もう、自分で考えよう、選挙に行こう、3度目の戦争をしないために。

2. 敗戦とその後 敗戦時は3歳だった。1945年ポツダム宣言受託による敗戦に伴い、外地在留日本人引き揚げ事業が始まり、台湾からも1946年3月2日から第一次が始まり基隆港、高雄港、花蓮港より最終的に1949年(昭和24年)8月14日第六次帰還事業(政府

レベルでは台湾引き揚げ)まで民間人32万2156人、軍人15万7388人の引き揚げ者をもって台湾からの引き揚げ事業は終わった。これらに使用した船舶は212隻。このうち83隻がリバティ型輸送船(第二次世界大戦の最中、アメリカ合衆国で大量に建造された規格輸送船の総称。戦時標準船)。他に旧日本軍の輸送船や商船が投入された。

私たち家族も1946年3月頃基隆港の「集中営」(集結港に作られた仮設倉庫)に集結。仮設倉庫に数週間寝泊まりし、乗船順を待っていた。他の集中営では泥棒に入られたり、石を投げられたりした話をよく聞いた。私たちも罵声を浴びせられたとのこと。かすかな記憶に残っている。姉さん(長女)の背中に負んぶされ、自作の「スズメ、スズメ、昇って行って捕まえる」みたいな子守唄をよく歌っていたみたい。頭の隅にこびり付いている。

母一人で兄11歳を頭に長女9歳、二女7歳、私4歳まで各人最小限の着替えと必需品をリュックに背負ってきたとのこと。私の分まで。本当に私は足手まといだったのだ。体調を崩して、よく泣いていたとのこと。引き揚げ船でのこともよく聞かされた。船名は忘れたが、貨物船だったらしい。船底で500~600人以上が雑魚寝。周りは全員知らない人達ばかり。私は食欲もなく相変わらずよく泣いて廻りの人に迷惑をかけていた。中には「うるさい、海に捨ててこい」と言われることも度々。その都度、姉が背負って船底から出て、子守をしてくれたとのこと。

そんなある日、高熱が出て瀕死の状態。熱さましの薬を誰か持っていないか母が尋ね、探し回っていた時、全然知らないお医者さんが来てB型血液の人を探して、採血、輸血して下さった。それで危ない症状も回復した。肺炎ではないか、といわれたそう。今、私が生きているのは、名前を知らないお医者さん、血液提供者、船底におられた大勢の人のお陰です。ありがとうございます。中には亡くなられた方もおられ、水葬を目にしたとも聞いていました。

**3. 引き揚げ後の生活** 引き揚げ港は鹿児島港の予定だったが、1946年3月9日桜島噴火により急遽、広島宇品港に変更されたそうです。到着月日は聞いたと思いますが、覚えていません。推測で3月9日以後、3月下旬頃までだったか。まだ寒かったといっていました。国鉄宇品線で広島駅まで行ったとのこと。原爆投下7か月後、焼け野原みたいだったと言っていました。詳しくは聞いていません。

すぐに九州方面の汽車に乗り換えさせられ、ぎゅうぎゅう詰めに押し込められたそうです。熊本県三角港まで何日かかったか、はっきりわかりません。おそらく2日はかかったのではないかと。三角港から天草大浦港まで船、大浦から赤崎まで15キロ弱と思いますが、馬車かバスで行ったと思われる。1日はかかったことでしょう。母方親の敷地内にあった小屋を改良し、

6畳一間に5人が暮らすようになりました。母は百姓の手伝い、兄姉も学校が休みの時に手伝いをしていました。私は一人、その近くで虫を取ったりしていたことを微かに覚えています。母によく甘えていたそうです。母の姿が見えないと、探し回っていたそうです。

そんな生活の中、私が5歳5か月頃、父が復員してきたそうです。初めて見る顔、初対面。「おじさん、おじさん」と呼んでいたそうです。懐かなかったそうです。抱いてもらった覚えもありません。仕事もなく家にいたそうです。私が家にいるとよく外に追い出されていました。遊びに行つて来いと。そんな生活も私が6歳頃、爺(父の親)さんの後妻、父からしたら義母の家3つ先の島子村に全員引越したそうです。そこでは義母との折り合いが悪く、口論。そのうち父と義母が殴り合いのけんかをするのを何度か見ました。私達兄弟も庭に植えてあるミカン、柿、畑の芋等を取って食べ、よく婆さんに叱られていました。

そんな厳しい生活の中、1947年2月に妹が誕生します。落ち着かない日々、その年の秋頃、父の仕事が見つかり天草中心本渡町に引越します。親戚の紹介で牛の敷き藁等保管している倉庫の一角に板を張り畳を敷き7人生活するようになった。鼠が多く、屋根の梁を走り回っていた。ある日、大きな青大将が鼠を呑み土間にどさっと落ちてきたこともあった。

父の仕事は電力会社が交通(バス)会社か迷っていたそうだが、電力会社の方は台湾で電柱に上り現地の人と作業中、その人に落雷。煽りで父も一緒に落下したそうです。現地の人は頭から足に雷が抜け、即死。父もどこか火傷を負ったそうです。会社は電力会社の方が大きかったが、そういう過去の嫌な経験から地方の交通会社に就職したそうです。

日々の生活は履物、着物もなく、草履を作る手伝いをよくさせられました。藁打ちです。稲わらを柔らかくなるまで木槌で叩くのです。余りにも乾燥した藁は水を少し振りかけて打つ。単純な仕事なのですぐに飽き、逃げ出していました。他の兄弟はよく手伝っていました。草履一足作るのに1時間以上かかったのではないかと思います。着物は継ぎ接ぎだらけの兄弟からのお古。兄弟らは親戚からの貰い物です。

食料が一番大変だったのを覚えています。主食はほとんど芋です。米は配給券?(配給証書)みたいなのがあったと思います。食事は米、麦がある時は米2、麦3、芋5の割合だったようです。おかずは漬物。自分の家で大根を干し、樽に漬けたものです。時々、鰯の日干しが出る時は嬉しかったものです。それでも食料が足りない時は母方の実家赤崎までバスで1時間半くらいかけ、私を連れてリュックに芋、麦、米等を貰ってきていました。道中が大変です。砂利道で凸凹、道幅も狭く、離合できるところまでバック誘導することも再々ありました。私はよくバスに酔い気分が

悪くなり、苦しかったことを覚えています。そういえば、バスの燃料は木炭です。バス後方にドラム缶様のタンクがあり、木炭を入れ、走っていました。そんな慌ただしい中、1948年年子で次の妹も生まれました。8人家族。貧乏人の子沢山です。

4. 小学校入学 1949年、本渡北小学校に入学。一学級40人くらいだったと思います。3組まであり、私は1組。担任は山下トヨ先生。優しい先生でした。私は小さい方でした。早生まれのハンデがあったようです。勉強は真ん中付近を行ったり来たり。宿題はなかったようです。日々、家で勉強した思い出はありません。給食は脱脂粉乳のミルクとコッペパン。堅かったが味がありました。3年生の頃は家に帰り芋を食べていました。給食代を払えなかったのかなと思います。往復20～30分、田圃の畦近道を走っていました。春は蓮華の花、菜の花、赤と黄色の色彩が今でも頭に残っています。時には蛇が行く手を阻むこともありました。昼休み時間学校で何をして遊んだか記憶にありません。

2年生の担任は中村先生。男の先生でよく接してもらったことを覚えています。何かの行事で校外に出た時、草履の鼻緒が切れたのを用意されていた布を切り裂き、直してもらったことが忘れられません。しかも、雨降りだったから尚更です。3年生の担任は山下秋子先生。20代の先生だったと思います。病気で2学期が始まりまもなくして休まれました。家も近くだったので同級生4～5人で遊びに行きました。先生とお母さんが大変喜ばれ、今まで見たこともないお菓子を出され、美味だったこと。何年前か、姉も担任だったことも話されました。

2学期の途中、私たちのクラスは半分ずつ3クラスから2クラスへと振り分けられました。2組の植村先生の担任に。配属将校上りの若い独身の先生。そのうえ教室はぎゅうぎゅう詰め。忘れ物、脇見、話し等したら、チョークは飛ぶは、廊下に出され、バケツに水を両手で下げ立たされる、拳骨はあるは、暴力のオンパレード。男子児童はほとんどが何回か経験しました。しかも、6年生まで同じ先生。クラス替えもありませんでした。何一つ楽しい思い出はありません。怖かったことだけが頭にあります。国民学校の忘れ形見、それとも戦争の後遺症でしょうか。

5. 家庭での生活 生活環境は極悪だった。下水道はなし。飲み水は片道300メートルくらいのところにあった共同井戸に姉さんらが天秤棒でバケツをぶら下げ、汲みに行っていました。私も小さめのバケツで何回か手伝ったことがありました。風呂は3軒先、親戚の家に週に1～2度は入りに行っていました。それでも年に何回かは20分位かけ共同浴場に行ったこともあり。広くて気持ちよかったことを思い出します。下水はないので穴を掘り、生活用水を溜め、天気の良い日は砂塵防止を兼ね道路に柄杓で水を撒いてい

ました。

生活は苦しかったようです。秋祭りの時には参道でヨーヨーを母、姉らが売りに行っていたこともあり。前夜、風船に水と空気を入れる器具で膨らませる手伝いもしました。余り売れなかったようです。器具と風船が残ってそれで遊んだ記憶があります。秋には渋柿を知り合いの農家から安く仕入れて湯練りで渋を抜き、売っていたこともあり。2～3日で傷み黒くなったのをよく食べていました。闇で芋焼酎を作っていたこともあったようです。鼻を衝く匂いがしていました。春先、学校が休みの時、山につわ藪を取りに行き、一本ずつ上手に皮をむき、一晩水に浸け、灰汁抜きして10～15本を一束にして翌朝早起き、学校に行く前近くの商店街に姉たちと一緒に売りに行ったこともあり。一束10円で売っていました。アイスキャンデー1本5円だった頃です。20束ほど売っていたと思います。その当時としては結構よい収入になっていたようです。

本も売っていたのか、銀の鈴社の本やらその他沢山の本があったのを覚えています。3年生の頃、「ジャックと豆の木」「蜘蛛の糸」等を読んだ覚えがあります。学校休みの時は、ほとんど家にいず、遊びに行っていました。川に釣りに行ったり、水遊びし溺れて危なかったこともありましたが、その後、泳げるようになりました。よく怪我もしました。道路でかけっこをしていて割れ瓶で足を切り9針縫う。その後1年もしないうちにまた、空き瓶で右手の腹を切り、見つかるかと叱られるから蓬の葉っぱを摘み止血をしていたが、見つかり病院へ。懲らしめのためか麻酔薬がないといって3人がかりで押さえられ5針縫われた時の痛いこと。ギャーギャー泣き、暴れたことを今でも忘れません。鶴崎病院も、後で聞いたことですが、その時の医者は軍医だったそうです。中学校に行く頃にはその病院はなくなっていました。

夏休みは早く起き、蟬、蜻蛉を取るのに網がないので杓文字型の竹籤を竹竿に取付け陽が当たる前の粘り気のある蜘蛛の巣(糸)を5～10張り巻き撮り、網代わりにしていました。朝食をとり、9時頃には遊びに出っていました。昼食は抜き。友人からもらった芋を食べ遊んでいました。野球をするにしてもボールがないからボロボロを丸くまるめ紐で巻きキャッチボールをしていたが、バット代わりの竹棒で打つと直ぐに解けていた。家の軒には女郎蜘蛛を山から取ってきて飼っていた。友達の蜘蛛と戦わせる。30センチ位の棒の両端に蜘蛛を乗せ、指で追い、棒の中央に寄せ、お互いに戦わせる。強い方が相手を蜘蛛の糸で丸め込む。そのままにしておくと血を吸って食べてしまうので引き離して、糸を解き逃がしてやる。軒下には勝った蜘蛛を5～6匹はわせていた。

すぐ上の姉はよく勉強していました。手伝いをしていない時は宿題、自主勉強もしていました。両親に褒

められていた。それに比べ、私は夏休みの宿題（夏休み帖）、日記等も毎日やらず、4～5日まとめて書くために天気を忘れてたり、生活内容も同じことを書いていた。「夏休みの友」は答えが分からず、上の姉には「こんなことも分からないの」とよく叱られながら教えてもらっていた。そんななかでも近所では20人位集めて、算数、国語、英語等を教えていたところがあった。暑いので窓は開けてあったので何度か立ち止まり、何をしているのかなと、立ち見をしたことがあった。同級生も二人いた。その当時、こんなところでなんと勉強するんだと思った。これが塾の始まりだったのだ。

社会情勢は連合国の占領下にあり、失業者は多く不安定、下山事件、三鷹事件、松川事件等、当時の国鉄3大ミステリー事件が相次いだ時代であった。当時の内閣総理大臣吉田茂。私の小学1年生から4年生(1949～1953年)までの出来事です。【徳本註：自分史には、事件の概要、背景等詳しいが、長くなるので、簡単に調べることもできるので、読者には補われたい。】

6. 引越す 4年生2学期の始まる前、夏休み最後の週、引越した。小学校も近くなり7～8分で行けるところ。今度は倉庫ではなく古い空き家だった。6畳2間と8畳くらいの居間に囲炉裏がある平屋建ての一戸建てです。知り合いの紹介で安く購入したようです。土地付き40～50万円くらいだったようです。母の実家に頼み込んで、お金は都合したみたいです。水は共同水道。リヤカーで汲みに行っていました。下水もないので穴を掘り、溜めて道路に撒いていました。風呂もないので盥で行水です。寒くなる前、五右衛門風呂を作ってもらったようです。学校が休みの時、母と姉二人は薪を拾いに近くの山に行っていました。私は行かない時は子守です。3回に1回ぐらい嫌々ながらついていき、枯れ枝や松葉もリヤカーのあることまで背負って、家まで30分リヤカー引きを手伝っていました。風呂を沸かす日が大変です。バケツで水汲みです。リヤカーに乗せ、20～30杯要ったと思います。竈番は私がやっていました。

一番上の兄は中学校を卒業し直ぐパン屋さんに見習いとして働いていました。夜の仕事を22時頃から朝の8時頃までだったと思います。昼は騒がしいので押し入れで寝ていました。休みの日はよく自転車に二人乗りし20～30分の所にある溜池釣りに連れて行ってもらいました。時々、自分が試しに作った山が5つもある大きなパンを手で裂いたり、指で押ししたり、焼け具合をチェックしていました。そのおこぼれを食べさせてもらいましたが、ふあっとして柔らかく香りがよく、今でもあんなパンは食べたことがありません。

5年生の頃、ラジオが家に来ました。真空管のラジオです。スーパー5級といって、当時最高の高性能のラジオだったようです。父は自慢していましたが、母

や姉はあんな高いものを買ってもっと他に要るものがあるのに、と不満たらたてでした。私は毎日、夕方、「鐘の鳴る丘」「笛吹童子」をラジオの前でかじりついて聞いていました。学校休みの日は手伝いを言われる前に逃げるように歩いて4、5分と同級生の家に遊びに行っていました。その家は専売特許樟脳（薬品、セルロイド原料）工場を営んでいる裕福なお家です。工場の当直室で将棋をしたり、月刊誌少年倶楽部、手塚治虫「鉄腕アトム」等、欠かさず読ませてもらいました。そこのお家で担任（暴力をふるうあの先生）が月に1、2回食事されている姿を目にすることがありました。

5年生の新学期から5年生全員校舎建て替えのため歩いて30分くらいかかる山の上にある明德寺というお寺に通学することになりました。昼休み、お寺の竹林に石を投げ、竹に当たる反射音、「カチカチ」を面白がり、竹に傷をつけ、男子全員本堂で座禅を組まされ、説教を受けたことが今でも忘れられません。6年生になり、新校舎で授業を受けましたが、ほとんど記憶にありません。今度はプールを作るといって、5、6年生全員20分ほどかかる近くの川に石を拾いに行かされました。2、3回は行ったと思います。学校の図書館でよく本を借りて読みました。『三銃士』『ファーブル昆虫記』等、頭に残っています。足は早く、中学校の運動会で小学校3校の対抗リレーに学校代表選手として走ったこともあった。これも昼食を取るのに家まで走った成果だと思います。

1954年弟が誕生します。年が離れているせいか、余り遊んだ覚えもありません。9人の大家族です。この頃から父によく暴力を振るわれるようになった。なんでか、訳が分からないまま。手の届くところにはいないようにしていた。すると近くにあるものを投げられた。食器や他、いろんなものが飛んできた。避けたり、逃げたりで怪我をすることはなかった。ある時、母が止めに入ったのはよいが、弾みで物が当たり、けがをしたこともあった。中学校の頃、私も反抗期に入り、ムカッと来て立ち向かうこともあり、その場に兄がいたら手助けしてくれ、父に言い寄ることもあり、大騒動になった。時々死んだらよいのにとすることもあった。父のいない日はホットし、のびのびしていた。

1954年当時の世相は、台風15号により青函連絡船転覆。死者行方不明者数1155人。日本海難史上最悪の事故。ビキニ環礁で米国の水爆実験による「死の灰」で第五福竜丸乗組員被爆。その他550隻のマグロ漁船が操業していたが、風評被害を恐れてか、あるいは米国、日本政府の圧力に押さえ込まれたか、表面は一隻だけの被害。12月吉田内閣の総辞職。「バカヤロー解散」。当時私はなんで日本人だけが何度も放射能の被害に遭わなければならないのかと思っていた。後で知ったのですが、ビキニ環礁に住んでいた住民の方々

も被害者だった。

7. 中学入学 1955年に本渡中学校に入学。本渡北、南、亀川の3つの小学校から集まる1学年7～8組あるマンモス校です。家から歩いて40分位かかりました。得意科目はありませんが、理科、社会、国語は好きでした。昼休み時、よく図書館に行き、本を借りていました。貸出カード1枚20回分を年間3枚は使用していました。2年生時、クラス分け。進学クラス、就職クラス。当然、お金がないからと自分勝手に決め込み、親に相談せず就職クラスで勉強です。驚いたことに数学担当の先生は小学2年生時の担任だった中村先生だったのです。その年他校から転動してこられたそうです。それまで数学は嫌いだったのが、なぜか嫌いではなくなり成績も「4」を貰いました。よく声をかけて頂きました。

年一回全校ロードレース約1万<sup>メートル</sup>米走には常に5番以内でした。部活は何もやっていません。お金がかかるからです。3年生2学期末、就職内定しました。愛知県の陶器を作る会社です。家に帰り話すと、父はそれはよかったといいますが、母が猛然と反対し、翌日学校に行き、「高校だけは出とかないと」と、内定を断り、進学させると担任に伝えたそうです。夏休み課題の図画「働く人」で鍛冶屋の職人さんがハンマーを振り下ろすところを描いた絵が西日本新聞社主催九州・山口地区絵画コンクールで最優秀賞を取り新聞にも載り、学校で全校生徒の前で表彰されました。

3学期、高校受験です。普通高校は無理ですので、県立天草農業高校を受験、何とか受かることができました。園芸科、農業科、家庭科（AB）別科（2年生まで）。生徒数550名程度の学校です。私は園芸科です。ハウス栽培、温室もありバナナ、パパイヤ他、亜熱帯植物、ラン等も栽培。当時としては先進技術を教えてもらったと思っています。私は菊の栽培が得意でした。3年生夏休みになると、自動車の免許を取るのに自動車教習所に行きます。当時は自動車学校でテストを受ける制度はなく、教習所で練習し、県公安委員会認定のテストコースで試験です。当時、丸ハンドルはなく、バーハンドル（自転車のハンドル）です、それも三輪車。練習費用30分500円。2時間2000円。試験料1800円で合格です。

世相は朝鮮戦争（1950年～）が勃発し、日本は戦争物資の依頼が来るようになり、戦争特需景気で51年には戦前のGNPを上回るまでに景気は回復していた。我が家は貧乏人の子沢山で相変わらず苦しい生活です。2学期にあった修学旅行にも行けません。父との確執も続いています。10月末就職試験を受けます。富士製鉄所（八幡製鉄と合併。新日鉄）学校推薦で当校から5人受験。私ともう一人、面接試験まで受けました。面接試験は受かったと口頭で聞きました。後は身上調査があるとのこと。結果は不合格。理由は分からず、納得できず。後の一人は合格です。

8. 入院・就職 (1) 12月冬休み前、就寝中に息をするのに胸が痛い。病院に行ったら肺結核です。父が結核で通院中だったので感染したのかもしれませんが。12月中旬から1月いっぱい休学し通院です。その間、学校の図書館で借りた本をよく読みました。漱石の『草枕』『坑夫』『ころも』他、レマルク『西部戦線異状なし』、ヘッセ『車輪の下』、スタインベック『怒りの葡萄』、ヘミングウェイ『老人と海』等々。2月に入り、授業日数、卒業試験等、学業に支障が出るので通学許可を貰い、何とか卒業だけはできました。

(2) 就職は近くの自動車整備工場に行きましたが、整備の仕事があまりなく、畑、土木等雑用。月3000円の給料ももらえず、3ヶ月で辞めました。その後、文具・事務用品の小売り卸業に勤務。片道20キロくらいある道程を毎日自転車車で配達。月4000～5000円の給料です。2～3ヶ月勤めましたが、先の見通しがないのでそこも辞めました。就職を求めますが、天草は離島のため大きな企業もありません。そうかといって島外に出るのも健康に自信がなく、踏ん切りがつきません。2～3ヶ月ぶらぶらしていた。父からの小言は毎日です。母からも経済的に苦しいせいか、「どこか働いたら」といわれるようになった。

61年（昭和36）の暮れ、父の勤める九州産業交通（株）、バス、貨物、ホテル等観光事業。従業員2500人を超す、当時としては大きい方の会社。トラック助手が足りないから臨時で働いて、勤務成績が良かったら正社員になれるといい、父に連れられて天草営業所長の家まで面接に行った。所長は威張り、父はペコペコ頭を下げていた。私も1、2度頭を下げたが、父がもっと下げ、と指で背中をつついたが、下げなかった。嫌な思いが残っている。暮れで忙しかったのか、トラックの助手で雇ってもらった。仕事は厳しく重たい荷物でも手作業、人力で積み込んでいた。当時、フォークリフトはなかった。朝は8時出勤。帰りは時間があつてないようなもの。帰った時が終了時間。荷物が多い時は遅く、19時～21時30分頃まで毎日。休みも月1、2回。えっ、こんなことが一生続くのかと思ったら嫌になった。学校生活が懐かしい。給料は7000～8000円。地元の会社が5000～7000円だったので良かったのかもしれない。当時、ラーメン一杯50～70円だったと思う。半年後、正社員になった。賃金も上がった。1万円～1万2千円。ボーナスも年2回出るようになった。家にも毎月2千円から3千円入れるようになった。

(3) 組合活動：労働環境は相変わらず悪い。どんなに残業、休出しても賃金は変わらない。事務職、バス・トラックの運転手、車掌はほとんどの職場から不満が続出していた。入社即組合問題で悩むことになった。第一組合（総評系）私鉄総連加盟約1800名。第二組合（同盟系）会社側約500～600名。父は第二組合（事務職）。入社当初から第一組合には入るなとくぎを

刺されていた。だが、周囲を見渡すと、言っていることは第一組合の人が真っ当で筋が通っている。人間性も良い。当然、父に黙って第一組合に入る。即分かり、猛然と怒る。今まで以上に心の格闘が起きる。以前みたいに暴力を振るうことはなくなっていた。父も上司から厳しく言われているのは知っていた。私は変な正義感が起き、頑として従わなかった。第一組合員に対する会社側のなりふり構わぬ切り崩しの激しいこと。退社時間を見透かし、家の周りで3～4人1グループで待ち伏せ本人、家族を威圧的な口調や態度で説得。それでもダメなら保証人、妻方の実家まで押し掛ける有様。そんなグループの陣容は、会社内の相撲部、ノンプロ野球部チーム（当時、全国大会にも出ていた）。1962年（昭和37）労働争議。地方労働委員会提訴案件250件。63年121件。

そんな時、63年春頃に1ヶ月強のストを打つ。当時の第一組合員数は日々の切り崩しに合い、全社的に500人強。天草支部は40人ほどに激減していた。今まで気軽に話しかけてくれていた人が話さなくなったり、2～3日休んだり、特に会社側に強いことを言っていた人程寝返りも早かった。今思えば、家庭を持った人は止むを得なかったと思う。天草支部スト決起場所は教職員組合会館を使わせてもらった。私は独身だったので20～30日は寝泊まりしたと思う。その頃の総評は全国的に強く、各単産からオルグに来たり、カンパがあったり、特に私鉄総連広島電鉄労組から来られた方は一緒に泊まり込んでもらい勇気づけられた。その間、熊本市内本社ビル周辺で他の単産労組も入り、500名強のデモ行進もした。本社ビル正門では体格の良い相撲部の人々がガードマンしていた。デモ後、団体交渉の一員として本社ビルで会社役員と各種案件の論争をしたが、私は確かな論を持たず何一つ意見を言えなかった。知識の無さを今も、無念に思っている。このような労働争議の中、地労委の裁決があり、残業・休出未払い賃金の支払い命令が下る。全社員（第一組合、第二組合）に2年間週り支給を勝ち取った。休日も週1回、悪くても月に3日は休めるようになった。有給休暇も第一組合の人は請求したら即取れるようになる。第二組合の人は請求するのためらう。請求しても何かと文句を言われていた。当時の天草支部第一組合員は女性一人を含む7人となっていた。ギリ貧です。熊本日日新聞地方版には、映画「七人の侍」に準ぞって「天草七人の侍」で記事になった。脱退者も含め第二組合員と関係もある一部の人を除きトラブルはなかった。「頑張つて」と言われることは再々あった。1965年頃の実態です。

**9. 労音・結婚** 翌66年3月から大型2種免許を取りに行く。4回目で合格。同年8月5日に取得。時間がある時はほとんど労音（勤労者音楽評議会）支部天草労音に行き活動していた。演奏会近くになると、ポスター貼り、宣伝カーの運転、前の演奏会場からの

楽器運搬、当日会場作りの手伝い等。会員数目標500名に対して400名前後を増減していた。会費は月500円。構成は学校の先生、銀行員、喫茶店のマスター、看護師、店主、店員さん等多種多様。夕方になると唄な人が自然に集まり反戦歌「さとうきび畑」等をよく歌った。妻博子さんも会員拡大中に知り合い、67年1月結婚。結婚資金がないのを知って、中学校の先生、喫茶店のマスターが博子さんの家まで行って説得。会費制で式を挙げる。一人500円。本渡町内の新しいホテルで挙式。120～130名集まり、盛大な学芸会みたいだった。出席者から大好評を得る。

天草労音例会（演奏会）はギャラの関係もあり、2～3ヶ月に1回の割合で開催した。初回はバイオリンの辻久子。サラサーテのチゴイネルワイゼン。本当に素晴らしかった。2回目は歌手なり立ての丸山明宏。自分のお母さんを歌った「ヨイトマケの唄」。感動しました。二人とも音響効果の悪い小学校の講堂で出演して下さったことに感謝しています。その後約3年ほどは映画館が会場です。特に印象に残ったミュージシャンはフォークソング歌手高石友也。「受験生ブルース」が大ヒット。2度の公演とも、演奏会後、旅館で夜中まで語り合った。上篠恒彦「旅立ちの歌」で大ヒット。映画「男はつらいよ」、他にミュージカル等活躍中。彼とも三角～本渡間定員15名ほどの小さな貸し切り船で色々話した。当時は駆け出しで、公演がない時は、東京の歌声喫茶「ともしび」で歌っているとのこと。立川澄人。NHK昼の歌番組に出演、台詞はすべて台本通りにしか喋れない、自由に喋れる労音の演奏会は楽しい、と。テノール歌手五十嵐喜芳。イタリア修行中での苦しかったこと、等、演奏会後、宿舎での対談が印象に残っている。その他、忘れられない出演者はドラマー白木秀夫、ポニージャックス、加藤登紀子、森山良子等。68年本渡市民センター開設。音響効果の良い500席のホールができた。柿落しに原信夫&シャープアンドフラッツの公演。ギャラも高かったが、立ち見も出る盛況。離島の地ゆえ文化、芸術が乏しかった天草に音楽を通じ、少しは心豊かさの向上に貢献できたかなと思う。66～68年、この間が人生で一番楽しく有意義な年だった。

69年3月3日長女誕生。同月7月痔ろうで入院。10月退院。11月再発、入院。翌年2月退院。当時休職。復職後大阪転勤を命じられる。一応断るも第一組合員全社的50名ほどになり、戦おうにも力なし。悔しさもあったがどうしようもなく退職する。敗北です。戦ってきたことに後悔はありません。

**10. 再就職** 70年春、地元のタクシー会社に就職。71年（11.6）長男誕生。会社は社員20名程度の小企業。毎月の給料に安定性がなく、ボーナスも小遣い程度。72年3月に退職。4月広島東洋工業（株）に就職。11月に正社員になる。生産管理部所属。新車の入庫、出庫管理業務、入社当時世界初のロータリーエ

ンジンコスモもあり、対米輸出が絶好調。増産増産で毎日1時間45分～2時間の残業。給料も今までにない最高でした。それも東の間、73年スエズ運河をめぐるエジプト対英・仏・イスラエル間の第4次中東戦争が始まる。原油供給逼迫、価格高騰、第一次オイルショックです。ガソリン高騰、トイレットペーパーが店頭から消える。世界は大不況。その煽りで国内販売減・対米他海外の輸出も減。在庫増大。本社内（広島）での保管場所が足りなくなり、工場建設予定地（山口県防府市）に車両を移動。在庫するようになる。それに伴い、在庫管理の一員として防府に転勤する。同年10月15日広島東洋カーブ26年目でリーグ初優勝。同年新発売のコスモロータリーAP車、久々ヒットするも他車種売れず。全国の販売店にセールス出向始まる。78年4月防府から広島へまた、転勤。宇品社宅へ。社内規定2年間とのことで80年4月高陽町県営住宅に転居。

82年東京へセールス出向を命ぜられ、2年間単身赴任する。個人により営業職に向き、不向きがある。私もどちらかという内向的で不向きです。出向に出された1割強の人が退職された。その点では会社の思惑通りだったのか。私には後がない。出来る範囲で努力した。話が苦手なので手当たり次第にチラシを配った。最初の1年目は年間5～6台しか売れなかった。他の仕事をさせられた。車検車両の引き取り、納車等、道が分からず首都高速を1周したこともある。販売店（仕事場）は吉祥寺。よく井之頭公園で休憩した。お世話になりました。宿舎は多摩ニュータウン。片道駅までの徒歩、乗り換えを含めると通勤に2時間半かかった。2年目になると、月2～3台売れるようになった。最後の月は受注残を3台残し、プロパーに引き継いだ。出向延長を要請されたが、否だったので即断る。84年3月セールス出向終了。元の職場に帰るが、1日100台を越す新車の移動には慣れるまで大変だった。毎日の改善活動に伴う提案件数生産管理で毎年表彰を受ける。品質月間標語最優秀賞取る。

社内駅伝。近隣住民、協力会社、社内の各部門200チームを超える大会。7区間15km走。52歳まで毎年出場。帰宅後真亀寺迫公園3kmランニングコースで長男中学1年生と練習、ある日、サーと抜かれた。置いて行かれた。嬉しかった。「うるっと」来た。

長女高2。夜勤明け帰宅。8時頃。何か嫌なことがあったのか、学校に行っていない。送っていくといっても行こうとしない。つい、かーっとなってお尻を2～3回叩く。無理やり学校に連れていく。今だったら、そうっとして休ませていただろう。今でも叩いた手が痛い。謝ってもいない。今度会ったら謝る。

87年県営住宅を出る。同じ高陽地区落合南に住宅購入。バブル期で高かったが思いきる。会社では15～20名に作業指示を出し、一緒に仕事をする、班長。毎週水曜日昼食時、課長、主任、事務員らと昼食会。意見

を言うという名目だが、指示が多い。意見と言っても程度の「言」だから軽いし、何もならない。陰では「毎週でなくても」「貴重な昼休みに会議を遣らなくても」等の陰口。それもそのはず。昼休みは、仕事が厳しいので仮眠を取ったり、長くなったり体を休める時間。ある時、いつものように「何か意見は」と問われた。ついに私の性分がでた。昼休みの実情を話し、「このような会議は止めるか、やるなら月1回にしたら」という。司会者が止めに入る。場がざわつく。その後、昼食会はなくなる。課長は協力会社に出向。私は昇進試験の声もかからない。60歳定年退職まで。だが、この会社で勉強もさせてもらった。品質管理、作業効率アップ、問題解決方法、報告書の書き方（5W1H）、ヒヤリハットに対する危険予知訓練（s.k.y）等。品質管理では部代表としてグループ員数名と全社大会にも出る。いろいろあったが、この会社で生活基盤をつくる事が出来た。子ども達も音楽関係のトレーナー、大学へとやる事が出来た。ここまで来れたのも妻博子さんの存在が大きい。一人ではとても。

2002年2月9日60歳誕生日、在職29年9ヶ月で定年退職する。翌3年10月市内の自動車販売会社に就職。納車、引き取り、カーコーティング、等の作業をする。特にカーコーティングの評判がよく忙しくなる。一人作業のため仕事量に追い付かない。そのうち右手指の関節が痛くなる。関節を伸ばす時スムーズに伸びない。無理して伸ばすと発条のようにびくっと痛みを伴い伸びる。病院に行くと、バネ病と診断。3ヶ月通院しても治らない。会社から引き留められるが、4年に退職。仕事を辞め1ヶ月ほどしたら指は治った。職業病だったのだ。

11. 文教女子大学勤務へ (1) 生徒・学生の「育心」：同年9月派遣社員として文教女子大学駐車場警備兼学内巡回警備の仕事に就く。駐車場警備で年数台のバッテリー上がり発生。その度、ブースターケーブルで繋ぎエンジン始動。なかにはバッテリー液が全くない車両も。その時は湯冷ましを応急処置として注入、始動させることもあった。お礼として手作りのクッキーに令状を添えておいてあったことも。ある時は、バイトに行くのにガソリンが足りない。お金の持ち合わせもないとのこと。長女の同年齢時を思い出す。1000円貸して、とよくあった。学生さんに10リットル分のお金を貸してあげた。「都合の良い時、いつでもいい」と言ったのに、翌日令状を添えて返しに来られた。実直な学生さんだった。「育心」。心を育て人を育てる、当学校の教育方針を見た。

6年4月駐車場警備なくなる。当直を兼ねて学校内建物出入口開閉、点灯、消灯、窓の閉め、エアコンの入れ切りのチェック等作業する施設警備員になる。朝5時半から高校、大学の建物出入口開扉、駐車場解錠、夜間は23時から24時頃まで。遅い時は2時頃まで仕事の職員の方も。22時過ぎたら学内は静寂。体育館

裏山から猿の威嚇するギャーという声に最初は驚かされた。植え込みから鹿の飛び出しも再々。6号館1階廊下。消灯したのに点灯。誰がいるのか確認するが誰もいない、足元を見ると大きな殿様蛙がいた。犯人は蛙だった。自動点灯センサーに反応していたのだった。

当直室から見た朝のひと時。足に軽い障害のある高校の生徒さん。毎日、少々早めの登校。6時20分から40分頃出勤時のお父さんが毎日送ってこられていた。寒い時は車中で10～20分暖を取られることもあった。娘さんが別れ際に必ずバイバイと手を振られ、車が見えなくなるまで見送っておられる。見ていてホッとするとひととき。また、ある時、8時15分頃。生徒さんが誰かを待っている。車が来た。お母さんが手提げを持ってこられた。娘さん、「遅いじゃない。早く持ってきて」。お母さん「準備もしてなく、忘れるのが悪いよ」。授業に間に合ったか心配。

(2) 出会い：当校の先生方との出会いが私の人生の中で学習意欲、学習力を一番高めさせてもらった。田中良枝先生。文教大学大学院通学時から孫のことで相談に乗ってもらった。院修了後は臨床心理士になられ、心理教育センター勤務時、2007年公開講座「こどもに関わる大人が元気になるヒント」（講師児童精神科医岡田隆介先生）の受講を薦められ、受講。大人目線ではなく、子ども目線から見えるもの、物の捉え方を学ぶ。発達障がいに関する本も貸してもらった。佐伯育郎先生。廊下に学生さん、先生の絵画・造形物の展示品をよく鑑賞させてもらった。展覧会出品の絵画制作で遅くなられた時、駐車場で立ち話等で親近感がわき、県立美術館、吉舎美術館、呉美術館、八千代の丘美術館等の案内状、招待券を下さり、鑑賞させてもらった。日展に何回も入選されている、「軍艦島」、鷲の絵は迫力も増し、素晴らしい。先生のおかげで今でも年に数回は妻と美術館巡りをしている。徳本達夫先生。夜、門扉施錠時、屋外の立ち話から始まる時事問題。安保法制案閣議決定は憲法違反では？戦争（第一次・第二次世界大戦）に繋がる明治以降の植民地政策等、分からないことを質問する。丁寧な答えが返ってくる、22時以降、早くて30分、1時間越すことも週に1、2回。今までの人生でこんなに真剣で誠実に関わってもらったのは初めて。2009年「人生論」、11年「ハンセン病」、12年「大人の哲学」、先生の公開講座を受講する。人生論では有限である人間、最期を迎えるまでの生き方が少しは見えてきた。私はハンセン病に関して全くの無知。各地に強制隔離施設があるくらいのことしか知らなかった。それが根底に日本のファシズム期、大政翼賛体制における優生主義と国策による誤った隔離政策だったこと、それに関連して水俣病事件のことも分かった。後で石牟礼道子『苦海浄土』全巻を読みきっかけとなった。「大人の哲学」では、「人が人を人と思わない」（緒方正人）所業から生まれた水俣病事件、ハンセン病問題。水俣病事

件では利潤追求のあまり有機水銀の入った工場排水が原因と知りながら海へ垂れ流した「チツソ水俣工場」。問題追及、補償要求に対して妨害する御用組合。被害者側に立ち諸問題を追求しストまでする少数派組合。当時から現在まで政府は会社側（大企業）にスタンスを置き、問題解決を遅らせてきた。今でも、水俣病の認定、補償問題は完全解決に至っていない。公開講座で色々なことを知ることが出来た。だが、今、私は他者に対して優しくしているだろうか？ナチスに関してユダヤ人虐殺はなぜかという質問中、私が福山市にあるホロコースト記念館に行ったことがないということで、連れて行ってもらう。しかも、私の分まで弁当を作ってこられていた。記念館では昼食後、担当者からの説明。大虐殺は第一次大戦敗戦によりドイツが負わされた巨額な賠償金、不満を持つ貧しい国民。他方、ユダヤ人は世界各地で金融業を営み、手堅い商売をしている人が多い。ドイツ国民も、ヒトラーもユダヤ人に対する誤った認識と感情を持っていた。それらを巧みに利用するナチスヒトラー。反ユダヤ感情を煽り大虐殺に至った。先生には1日付き合ってもらった。私にとって貴重な体験授業だった。

善本先生に良く声をかけてもらった。吹奏楽部定期演奏会には案内状をもらう。東・安佐南・安佐北等各区民文化センターへ演奏を聞きに4～5回は行った。また、附属高校定期演奏会では森下学長の司会と歌が印象に残っている。大野内先生。5号館音楽室からのソプラノ発声練習。駐輪場まで先生の声が聞えてきた。凄い。その後、安芸区民センターで行われた「あきクラシック」コンサートに出演。数回聞きに行った。鈴の音が入ったようなソプラノの唄声。美声に鳥肌が立った。2020年新型コロナ禍の影響で各種演奏活動が中止になり、唯一の楽しみを奪われる。

12. 文教退職、そして現在 2017年3月当直・施設警備員を退職。62歳から75歳まで約13年間勤務、いろいろと有難うございました。

18年3月舌癌になる。5月広島大学病院で切除手術経過観察中。今のところ異常なし。後遺症として味覚障害（旨味が少ない）、言語障害（づ、ブが言いづらい）。21年7月79歳5か月。人生の最終章。物欲、殆どなし。性欲、無きに近し。食欲、高価な食物は欲しくない。夕食時350mlのビール1本。金持ち資産家にならなくてよかった。有ると煩わしいと思う。

13. 最近の世界と日本 (1) 世界のこと：世界の超富裕層26人の資産153兆円は世界人口の半分の資産と同額を独占。そんなにもってどうするの。資産税を取り、格差社会の是正を。今の世界情勢、政権の長期化の国、シリア、ロシア、中国、北朝鮮等独裁者が多々。自由にモノが言えない国、特に中国習近平の強権帝国。ウイグル族への大圧政治。香港安全維持法による取り締まり強化、言論の自由が全くない。民主主義の完全崩壊。あつという間。2年間で香港が壊れた。



(2) 日本のこと：五輪開催誘致の安倍前首相お得意の「嘘」スローガン「復興五輪」。原発事故の処理、何もできていない。放射能汚染水他、諸々。菅政権、コロナ禍まっただなか、国民の50%以上が中止を求めるのに。誰のために何のために開催するのか？有力な選択肢を示さず納得のいく説明もない。政府・東京都も「安全・安心な五輪」を繰り返すだけ。終了後の決算報告。多額な赤字にならなければよいが。税金による国民負担に繋がる。毎年起きる豪雨、土石流災害等の対策費用はどうなるのだろう。今の日本、この数年、安倍自公政権により「見せかけの民主主義」へと後退。森友学園、加計学園、桜を見る会、財務省「赤木ファイル」等、公文書の改ざんや破棄、遺棄、隠蔽、国会の虚偽答弁、黒を白と言いくるめる、三権分立を揺るがす検事総長の恣意的人事。政権に不利な言動を排除。日本学術会議6名の任命拒否。説明もなし。個別事案だけではない、政府が空疎な言葉で国会答弁を埋め尽くすことで国会そのものが機能しなくなった。人事を含めて官邸に権力が集中。政治家も官僚も不承不承。追従。権力者があらゆることを好き勝手にできるようにした。このようなことが許されると日本も香港のように、戦前あった治安維持法を復活させるとともに、AI技術を導入、監視を強め、市民一人ひとりを縛り、表現・言論の自由が奪われる。

(3) 元オバマ大統領から前トランプ大統領への置手紙。「われわれは一時的に大統領の職を勤める」だけとした上で三権分立、法の下での平等、自由の権利等民主主義の「守護者」でなければならないと認めた。今の自公政権にも当てはまる言葉だ。上述の独裁者も人間は有限である。いずれ最期を迎える。独裁者一人のために多数の市民を巻き添えにしてはならない。そうさせないためにもよく考え、事なかれ主義に走らず、行動しよう。選挙に行こう。二度と徴兵制度、学徒出陣に見舞われないためにも。戦争とは？「親より子が早く死ぬこと」。誰の言葉か忘れた。一理ある。自分史、この後何頁増やせることやら。今朝も軒下のゴーヤ、胡瓜、緑のカーテンに実がたわわ。2021年7月25日

付記：自分史投稿に当たり、徳本達夫先生には推敲、監修等助力いただき、心より感謝いたします。(名塚紘一)

## 2. 名塚「自分史」を味わう

本誌読者より先に名塚「自分史」を味読することのできた徳本たちは、この特権を活かそうとした。質疑応答がそれである。聞き手には前稿に倣って今回も卒業生を指定した。

### 資料2 名塚「自分史」への質疑応答 (2021.10.30)

#### 1. 名前を背負う

徳本：有難うございます。こんなに早く完成すると

は、正直、驚きです。手書きA4版28行。22枚。6ヶ月。大変でしたでしょう。何とか入力を終えて、肩の荷が下りました。大事な記録。公表責任を感じながらの楽しい作業でした。入力者の醍醐味かも。入力しながらお尋ねしたいことが多々。卒業生ともども質問や感想などを。

名塚：昨年、「座談会」で自分史の一端を語り、以前、大学の公開講座で受講した「自分史」から考えてきたことを一気に書きました。それでも6ヶ月はかかりましたが。

徳本：歴史的背景を背負ったお名前ゆえの、歴史や社会への厳しい目は響きます。宇一、東亜、という名前の方も知っていますが、その人たちからは背負い方についての思いは聞かれなかった。私が未熟だったからですが。一つの歴史的使命のようなものを感じます。使命を果たし続けておられる。いつごろから意識されたのですか。

名塚：高校生の時、『人間の条件』という映画を観てからだと思います。戦前・戦中、組織(国)が個人に対して理不尽なことを平然と行った。それに対する抗議・抵抗、正義への思いからです。

徳本：名前の由来、名前にまつわる背景を知ったが故ですね。全体と個の問題は永遠のテーマです。全体に埋没しない確かな個をどうやって獲得していくか。前回の座談会でも根本にあった主題でした。今回この後、続くと思います。仮に敗戦という結果でなければ、当時の国家政策を体現した名誉な名前ということになったのでしょうか。あるいは、苦悩する。私のような名前では浮かばない問いです。生まれながらに時代や社会を意識するようになっていた。同様なことは多々あるはずですが。個が全体に埋没する組織は早晩、崩壊する。全体主義の宿命です。

名塚：全体主義国家は三国同盟の日・独・伊、すべて崩壊しました。ホロコースト大量虐殺はその過程で生まれたことです。自分史の中でも書きました。

徳本：イタリアは自らの手でムッソリーニを殺害したので、敗戦国ではない。戦争責任にどう向き合うかが日独の課題となって今日に至っています。座談会の名塚発言の通りです。人は誰しも、誕生と共に有無を言わずその国の歴史的責任性を背負わされる。誕生以前の事柄についての直接的な責任はないが、以後のことについては年齢相応分の責任がある。歴史を学ぶことを通して同時代に展開されることについての責任、時務への応答を全うすることが求められる。その国が持つ国民性を理解した上でその後の歴史的展開に対しての責任です。名塚さんは、名前のことも含めてそのような生き方をしておられる。学びたいです。

#### 2. 引き揚げ

徳本：引き揚げ時の経験は壮絶ですね。数多の人垣あつての現在。そのような身体に刻まれた記憶が社会に、人に対する熱い思いとなって形になっているんで

すね。

**名塚**：最初と最後に社会への思いを書きました。足りませんが。その後のことも、たくさんありますけど。少しずつ。

**徳本**：「足手まとい」。本来は最も大事にされるべき幼児。過酷な状況は一転して最も弱い者を邪険にする。お姉さんにすれば、責任感ゆえの底力となったと思います。希望でもある。その時の心境のことはお聞きになりましたか。

**名塚**：私が高校生の際には姉は東京の方に就職してましたので、そこまで深く話したことはありません。責任感とかそういう深い考えはなかったのでは。ただ可愛いベットの存在だったのではないかと思います。

**徳本**：困難な状況下の時には、その人の素が出る。優しいがゆえに逞しいお姉さんになられたのですよね。  
**卒業生**：私もそう思いました。人は我が身かわいさが出る。それだけにあのような戦争は起こしてはいけません。

**徳本**：同感です。

**名塚**：今回の自分史は、当時3歳だった私の声でもあります。

**徳本**：敗戦時3歳だった幼児に現在の日本はどう映っているのでしょうか。非業の死者からはどうなのでしょう。戦争や暴力は真っ先に弱いもの、子どもの上のしかかる。だから何はさておいても、この厳然たる事実を子ども自身が学ぶことから始まると痛感しています。

**卒業生**：平和教育の徹底ですね。広島ですから平和教育を受けてきましたが、学生時代に他県の学生との違いには驚きました。継承していきたいです。

**名塚**：戦争が起きるということは戦争当事者がいる、がやがていなくなる、その時代を生きていた人が老いて死す、悲惨な経験をした人もいなくなる、記憶や教訓の継承が旨いかな。盧溝橋事件のように、関東軍が仕掛けた日中戦争発端となった事件、どこまで本当のことを教えているのだろうか。『太平洋戦争への道1931~1941』（半藤一利・加藤陽子・保阪正康編著）があります。

**徳本**：私は未読ですが、読んでみます。優れた本から補うことは必要ですね。子どもに対して「残酷」という人もいますが、現実残酷そのものですから。名塚さんの体験も継承したい。

### 3. 被害(者)性と加害(者)性

**徳本**：「国内外を不幸にした。私たちもその犠牲か?」と。被害者性と加害者性についてはどうお考えですか。3歳で感じた現地の人たちからの「罵声」も加害性を感じる背景になっているのですか。

**名塚**：「罵声」のことは中学・高校時代に母から聞いたことです。「敗戦前は現地の人々は丁寧な言葉づかいで、おべっか(今でいう、忖度)を使っていた。敗戦になった途端、言動が180度違ってきた。」と。罵声が

大きいほど現地の人を苦しめていた。加害者だったのだ、ということです。国策による植民地政策によって被害と加害の両方を作り出していた。裏表で四者になる。

**徳本**：大雑把な図式で言えば、加害国の国民として絶対的加害者、被害者結果的加害者が、被害国の国民として被害者的加害者、絶対的被害者が生まれる。4つの型になる。戦後世代に加害者認識が乏しいのは、皮膚感覚としての体験がないからでしょうか。本や映像を通しての理解がどこまで皮膚感覚になるか。3歳であっても、その時のことが皮膚感覚として残っているということですね。時代の証言者です。

**卒業生**：平和教育の難しさです。語り部の証言をどこまで自分の言葉で理解できるかですけれど。語り部の証言を受け継ぐ若者たちは体験に迫ろうとしています。私も語り部の証言を聞いて育った一人ですが。実体験との差は大きいです。

**徳本**：その姿勢が広がりますように。伊丹万作の至言は、加害者にも被害者にもならないための基本。このことを自覚して生きることへの熱い思いが名塚さんを動かしている。

**名塚**：平成30年1月の「シルバー・キャンパス(高陽公民館主宰)」での「防犯講習会」「高齢者を狙う最近の特殊詐欺」「昆虫の騙しテクニック(擬態)」の資料最後のページに載っていた記事です。講師の凄さを感じました。

**徳本**：講師の心からのメッセージですね。被害者は加害者になり得る。だから被害を黙認しないこと。折に触れて強調しましたが。矛盾の拡大再生産。戦争という国家大の事件が家族における負の事件を生む。それに抗うには国家を超える条理や倫理、家族における民主主義が大事になる。どう具体化するかですけれど。

**名塚**：日本は戦前・戦中・戦後と隠ぺい・破棄・改ざん・嘘の発言。反省なし。相手への想いもない。先日も一部の教科書に「従軍慰安婦」を「慰安婦」に、「強制連行労働者」を「労働者」に、言葉の言い換えを認めた。

**徳本**：閣議決定されましたから(2021年4月)。教科書絶対主義を超える学びが求められる。鵜呑みにせず、批判的な読み方をする。市民性教育。シチズンシップ・エデュケーション。ここでも伊丹万作の名言が生きている。誤った国策への異議申し立てを怠らない。健全な民主主義社会の自立・自律的主権者の矜持です。

**卒業生**：重たい言葉ですね。さっきのことにも関わって、学級の民主主義もその意味で大事です。それぞれの家族の姿がいろいろなところで出てきます。いじめ加害者も家族の中で被害者であることも多いです。それを見抜く力が求められているのです。

**徳本**：伊丹万作の言葉は自分のものにかどうか。言葉としてだけでなく。日々の行動で。

卒業生：先ほども出ましたが、引き揚げ時のお姉さんの強い思い、打たれます。共通の困難を耐え忍び、超えていこうとする。そうした経験がお姉さんをしてさらに逞しい、優しい人へと育てられていったと思います。

名塚：姉は私には優しい人でした。私同様、父から虐待を受けていました。姉の夫は一人娘を残し病死（50歳）。姪は高1。英検2級、活発で明るい子です。姉とは東京出向時、24、5年ぶりに再会。「まあ、立派になったね」と喜んでくれました。お互い再会を喜び合いました。が、それから10か月後、自死しました。私と会って何を感じたか？会わなかったらよかったと、今でも後悔です。

徳本：そうだったんですね。お悔み申します。姪御さんにとっては頼りになる叔父さんですね。お互いにお大事に。

卒業生：……。

徳本：日本は誤った国策によって国民に過酷な体験を強い責任を取っていない。戦争責任に対する日独の違いは今後も話題になるでしょうが。ごきょうだいで過酷な経験を強いられたことに対する怒りは共有できていたのですか。

名塚：貧乏に対する怒りは親子共々に持っていたと思います。台湾での生活が良かったことを何度か聞いたことがあります（庭にマンゴー、バナナが実っていた、等）。引き揚げ後の極貧生活に対する怒り、はけ口を各人持って行くところが分からなかったのではないかと思います。

徳本：それも戦前の教育の悲しい成果。大日本帝国の為政者からすれば、見事な教育効果ですが。

卒業生：教育はその意味でもとても重要です。基本を忘れずにやっていきたいです。

名塚：昨年の座談会が懐かしいですね。

#### 4. 原型としての母

卒業生：結婚相手の元へ赴くお母様は行動的ですね。当時の女性はみんなそうだったのですか。

名塚：母から聞いたことはないですが、当時の農家は貧しく、食いつ持を少なくするため。国策に乗り、国全体がそういう雰囲気になっていたのです。

徳本：農村の貧困ゆえの被害者であり、結果として他国への加害者になっていく。個人的なことは政治的なことである、という見本です。個人としては国策を積極的に関与したのに、大きな絵の中では加害者だった。どこで歯止めをかけることができたのでしょうか。日本の近現代史の学習がもっと必要です。名塚さんのような学びですが。教育史の授業では日本の現代から遡っていく方式を取りました。現在と過去との関係を意識するような。

卒業生：新鮮でしたね。歴史の新しい勉強の仕方でした。

名塚：さっきも出しましたが、加藤陽子さんたちの仕

事がもっと読まれるといいですね。日本学会議のことはそのままですが。

徳本：内閣が変わっても手を付けないのではないですが。なし崩し的に。かくして学習性無力感が浸透する。政治による国民の政治離れです。話は戻って、名塚さんの人としての原型はお母さんとお姉さんですか。

名塚：母からだと思います。

#### 5. 貧困の経験

徳本：貧困の経験が紘一少年の目を社会に開いたのでしょうか。私も、貧乏家庭を生きてきて、社会に目覚めました。きょうだい効果はみごとですね。

名塚：貧乏人の子沢山で、きょうだい効果はありません。貧乏という負の遺産を断つには一代ではできない、私はとにかく子・孫のためと思い必死に生きてきました。

徳本：貧困を生み出す社会や政治のありようへの鋭い感覚もここから生まれたんですね。最近の「親ガチャ」を超える生き方。と同時に、幼少時代、時には、ちゃっかり手伝いからスルーする。きょうだいから大目に見てもらっていたのですね。仕事の質に関しては厳しい見方をされる。ものが分かっていたからでしょうか。

名塚：きょうだいのちょうど真ん中。甘えていたのかもしれませんが。就職してからは、労働争議の時、揚げ足を取られないようにと、必死さから生まれたのだと思います。

徳本：子ども時代からの鋭い感覚。読書体験効果でしょうか。

卒業生：読書家でもあったのですね。すごいですね。

徳本：多読は退職後の余暇活動ではなかった。学童期から本の虫だったのですね。本がたくさんあった環境も後押ししました。

名塚：当時の娯楽としては、図書館で本を借りるのがお金もかからず、自分に没頭できたからだと思います。

徳本：根と翼を獲得できた。物の見方や人への接し方も、実体験と共に読書からの学びだったのですか。

名塚：意識したことはないですが、本の中から知らず知らずのうちに得た知識がその場面場面で対応に役立つのだと思います。

徳本：昼食を食べに帰る田園の風景。映画のシーンです。紘一少年への自然からの学び。

卒業生：足の速さでさらに報われました、良かったですね。

名塚：地域、職場での運動会、ソフトボール、社内駅伝等で発揮できました。

徳本：足の速さは息子さんに受け継がれて。

名塚：孫、下の方が早いみたいです。

卒業生：進化が続きますね。先が楽しみです。

6. 教員の思い出

卒業生：先生についての思い出は詳しいですね。

徳本：特に「配属将校上りの先生」、敗戦に伴う価値観の転換はなかったのでしょうか。敗戦時、3歳だった子ども達が相手。名塚少年のような厳しい視線は感じ取れなかったのでしょうか。「ボクラ少国民」シリーズの山中恒は敗戦当時中学生だった。元軍人教員が腹を切るのではないかと思っていたという。

名塚：余り思い出したくない先生です。腹を切る責任感がある先生ではない。70歳の時の同窓会。樟脳工場の友達と54年ぶりに会い、話さず中「あの先生はよい先生だった」と言ったのを聞いて唖然としました。

徳本：評価は様々ですからね。辛い記憶の美化でもないのでしょうか。家庭環境の差故でしょうか。

卒業生：授業の印象がないのも。授業内容のせい、先生の雰囲気のためか。どうなんでしょう。

名塚：授業内容のせいでしょう。

徳本：戦後民主主義の息吹はどう感じになったのですか。

名塚：学校では戦争の原因、戦時中の話等はなかったと思います。中学校時代、町の本屋で立ち読み。アウシュヴィッツ収容所の死体の山の写真を見た時はショックでした。

徳本：出会うべくして出会われたんですね。学びがさらに本気になった。その点では私は晩稲でした。思い出すのは、中1時。当時の韓国の李承晩大統領が設定した李承晩ライン。日本漁船が拿捕される事件が続発していた時期です。軍事政権に抵抗する韓国の若者に熱いものを感じて、クラスのモナ・リザさんに手紙を書いたほどです。いろいろなことを考えてから、という返事。熱が冷めた。早合点していると自分で思ったからか、長続きしなかったです。学校での勉強と社会とを繋げられなかったのももったいないことでした。返事が違っていたら、もっと早く開眼していたでしょうが。中2の時は、担任が轢を立てて自転車デモ。下校中に出会い、お互いに手を振った。迫力を感じましたけど、ここでも勉強には繋がらず。3年の時、就職する生徒たちにその教師が詩の朗読を促したものの、恥ずかしがって読まない。私が立ち上がって先鞭をつけ、彼ら3人が後に続いたのを思い出します。その教師への尊敬があったからの反応だったと今、思います。高村光太郎の「クロツグミ」です。

卒業生：そういうことがあったんですね。

名塚：私の中学時代は差別され、2年生頃から進学組と就職組に分けた教育(教科)がされていました。教師に対する思いもありません。1年、2年、3年、と担任の名前すら思い出せません。友達が一人いました。イラストが上手で、40歳過ぎ頃まで年賀状に楽しい風刺漫画を描いてました。高校になると、3年間森木先生が担任でした。この先生は自分の生活のこともよく話されました。サラサーテのチゴイネルワイゼ

ン、演奏も難しいが曲が素晴らしいとの話が頭に残っていました。偶然にも、自分史に書いたように、労音演奏会で辻久子の演奏。テンポの早さと緩さ、人生の喜びと悲しみを素晴らしいテクニックで表現されました。森木先生が言われたことが実感できました。

卒業生：いいお話ですね。私も一つ一つ、大事にしていきたいです。でも、進学組と就職組のこと。ひどい話ですね。

徳本：当時の私は、就職後、心の支えになるような学びを、と教師が願っていたと感じ取ったので反応した。そそっかしい生徒ではあったのですが。

7. 戦争に行った父親と息子の関係

徳本：戦争を経験した父親と息子の関係は複雑です。戦争の後遺症です。その意味では子どもでもあった私たちは被害者です。私が20歳の時に父を亡くしたため、戦争をめぐる話は出来なかった。20年間一緒だったのに、もったいないことでした。名塚さんの所ではその後の関わり等はどうかだったのですか。ご自身、父親になられてお父様への感じ方に変化はありましたか。最終的には和解となったのですか。私自身は、父親になった時に亡父のことが思い浮かんで、病院に行く車中、泣きながらの運転でした。複雑な愛情を感じました。

名塚：私が52歳の時に亡くなりました。脳梗塞で2年ぐらい病院で寝たきり。植物人間状態です。2回ほど見舞いに行きましたが、意思疎通はなし。最期まで戦争の話は聞けず。和解もできませんでした。それが残念です。

徳本：お父さんも残念だったと思います。南方戦線で従軍されたのならなおさら。大岡昇平『野火』、塚本晋也監督の映画でも、南方の圧倒的な自然の美しさと過酷さ。飢えと病気。地獄です。人肉食も当然でした。そのような地獄を生き延びられたのでしょうか。相当深刻な思いを抱えて生きてこられたはずですよ。2年半の抑留生活だったのでしょうか。

名塚：残念ですが、鳥の名前を憶えていないので、、、

徳本：作家たちも最晩年の父親と歴史的やりをしています。辺見庸、高橋源一郎など。辺見さんは『完全版1★9★3★7年』(上・下、角川文庫、2018年)で追体験を試みています。文庫本「あとがき」に父親に評価を仰ぐ一文を記しています。高橋さんは叔父の戦歴を辿って現地を訪問しています。過去ではない、現在の自分と繋がる生きた歴史との向き合い方。戦争体験者・戦時生活体験者から学ぶことは多い。

名塚：私の個人的な思いとしては、絶対に父のような、人の話も聞かず、暴力を振るう大人になるまいと。反面教師としての学びです。

徳本：それだけ過酷な体験だったということ、そしてそれが家族をも苦しめた。苦しむのはいつも庶民です。

卒業生：だから伊丹万作なんですね。

徳本：ですね。話は変わりますが、読書家でありながら、勉強家ではなかった、と。なぜでしょうか。元軍人教員への反発からですか。

名塚：戦前、戦中の軍国主義のありさま等は一切教えてもらえなかった。戦後民主主義の実感も分からなかった。対比する術がなかったです。今の政権も、自分に都合の悪いことは言わない、見せない、後世に引き継がないから、反省もできない。

徳本：その分、身体で感じていくしかないのでしょうかね。戦後民主主義の息吹が本気の勉強に繋がるということとはなかったのでしょうか。時代の雰囲気として。

名塚：何事をするにもまずお金のことを考え、その先には行かなかったですね。

徳本：貧困は人の潜在的可能性を潰す一例ですけど、そこから反転する生き方が生まれる。親が敷いたレールの上を無難に生きるような人生からは生まれようがない。そのような人が行う仕事も凡庸に止まる。棺を覆いて事定まる。

卒業生：その点、高校は最適な学習空間だったのですね。

名塚：進学校ではなかった分、ある程度好きなことができました。

## 8. 貧乏の中の生きる力

徳本：衣食住。水汲みと運搬と。私の子ども時代は手押しポンプでした。1回でマグカップ3杯程度。風呂水は300回以上だったでしょうか。体重をかけて。要領を工夫しながら。運搬がなかっただけでもずいぶん楽でした。

名塚：そういう時代だったですね。

徳本：子ども服のお古。『命のまもりびと—秋田の自殺を半減させた男』（中村智志、新潮文庫、2017年、単行本2014年改題）の佐藤久男さんも、子ども時代はつぎはぎの服。それが惨めだった、と。「金持ちのつぎはぎなら恥ずかしくない。貧乏感はねえんだ」。この感覚なんですよ。私は、近所の先輩のお古。中学校時代はカッターシャツならぬモラッター<sup>モラ</sup>シャツ。生活が少しでも楽になるので有難かったです。今でも、同じ感覚です。襤褸は着てても心は錦！つぎはぎではなかったからでしょうか。

名塚：社会全体がそのような時代だったので、服装のことはあまり気にならなかったです。

徳本：最重要な食。主食が芋。8年の違いは大きいです。水団はよく食べました。給料前数日間はそうだったと思います。魚は粗<sup>すい</sup>が定番。おかげで何でも食べる力がつきました。私の場合、グルメ志向ではないのはこうした体験からでしょうか。

卒業生：祖父母たちの時代です。体験は聞いてきました。

名塚：小学校の頃は遊びの中で山野の食物をよく食べました。椎の実・榎や桑の実、グミ、枇杷、野イチゴ、山ぶどう、イナゴ（焼く）、手長エビ（焼く）、潮

目の良い時にはアサリ堀り。現在はよいですね。金さえあれば、何でも食べられますから。

徳本：今回、サプライ・チエーン崩壊でお金があっても役に立たない状況も生まれました。マスクひとつとっても。「アベノマスク」、忘れてはいけない。愚策でした。安倍さんたちには、庶民の生活が全く見えていないのだなど。生きる力がないと、生きていけない時代です。

卒業生：生きる力を実際の力ですから。知識だけでは通用しない。

名塚：食糧難が来ても少しは長く生きられるかな？

徳本：生活維持のための内職、水汲み等、「地べた」を生きてこられた。逞しい生命力・生活力の源。遊びの工夫も。名塚さんの比ではないですが、私にとって貧乏生活ゆえの逞しさはご褒美です。栄養失調にならない程度の食糧はあったのですが。学校給食は救いでした。脱脂粉乳であっても美味でした。家では牛乳を飲む習慣はなかった。そこまでの余裕がない。こうした体験が子ども達には伝わりにくいのが残念です。「時代が違う」の一言で返されると言葉が続かない。歴史的感觉が育てば違ってくるのでしょうか。便利さは生きる力を削ぐのですけれど。

名塚：同感ですね。自分史でその一部を伝えられたらと思います。

卒業生：さっきも出ましたが、映像や本では知ることが出来ても、実感するのは難しいですね。数日間の野外活動などで少しは不便な環境を体験することで補ってきましたが、すぐ元の日常に戻りますから。課題です。

名塚：キャンプ生活体験は必要ですね。まずは火をつけることから。

徳本：生き延びる基本。貧困のお陰でプレイデイみかこがいう「地べた」の経験が社会を低い視座から見ると原型になった。私にとってもご褒美です。

## 9. ビキニ事件・「尋ね人の時間」

徳本：1954年のビキニ事件。私は事件を扱った街頭紙芝居で知りました。住宅の広場に近所の子ども達が黒い山を作る。青・黄・赤中心の色彩豊かな分、恐怖の伝播は衝撃的でした。少しでも雨が降ると、「放射能、放射能」と大きな声を出しながらすぐに濡れないように避難していました。5歳の頃でしょうか。紙芝居のおじさん以外に大人はいなかったので、大人の反応は分かりませんでした。名塚少年12歳。社会の動きに敏感な少年。

名塚：新聞を見て、少しは知っていました。

徳本：その社会的意識は当時の人びとにとっての共通の課題だった。それが原水爆禁止運動へと発展していった。社会的うねりは実感されたのでしょうか。学校の授業とのずれにも敏感になられたのですか。

名塚：学校では特にビキニ事件のことは教えてもらえませんでした。大人の反応もなかったようです。

徳本：第五福竜丸、無線で救助を求めていたら、米軍に始末されていたはずです。真相は闇の中になっていました。60歳過ぎて資料館で福竜丸に出会い、船体を撫でながら過ごしたことを思い出します。皮膚感覚として残しておきたいとの思いからでした。

名塚：広島市立大学の市民講座、徳本先生から誘いを受け聴講。水爆実験の実態、多くの島民、第五福竜丸以外の多数の日本漁船員の「死の灰」、放射能被曝等、多数の被害があったことを知りました。大石武一さんも亡くなりました。証言活動を積極的にされましたが、徳本：直接肉声を聞く機会を作らなかったのは後悔です。ラジオにまつわる話。男親は生活が見えていないという典型。番組は私もかじりついて聞いていました。同時代史。「尋ね人の時間」という番組も。社会の裏の暗い部分を知るきっかけになりました。「外地」という言葉も。自分の肉親ではないのに聞き入っていたのは、私なりの使命と感じていたのか。社会に目を開かせてくれた番組でした。名塚さん一家も場合によっては番組で照会されていたところですが、歴史の証人です。

名塚：「尋ね人の時間」、私もよく聞いていました。それと舞鶴港への引き揚げ船のニュースも、です。

徳本：「中国残留孤児」と政府のいう人びとの肉親捜しは映像も絡めてなされていたが、「尋ね人の時間」と違って、時間的経過が余りにも過ぎすぎていた。同じ国策の戦争被害者でありながら、敗戦直後の方が迅速だったのは故なしではない。満洲国にまつわる隠された史実が当事者によって記録・発信されている。1932年建国、1945年崩壊。傀儡国家ゆえです。長野県の民間施設満蒙開拓平和記念館には一緒に。「棄民」政策の本質が見えてくるはずですが。

名塚：オリ・パラで感染者が急増しているの、コロナの終息がいつになるか。それに80歳になりますから。

## 10. 「働く人」

徳本：絵画。「働く人」。鍛冶屋さん。現場をよく見ておられるからこその作品だったのですね。新聞記事、家族版の自分史に添付されると迫力が増します。余談ですが、私は静物を描く課題で煙突掃除用ブラシを書きました。小5・6年時に煙突掃除を手伝っていたことが背景だったのでしょうか、入選以前でしたが。

名塚：新聞記事はありませんが、賞状は探せばあると思います。当時、パレットに残った絵の具を洗い流すともったいないので、積み重ねた色合いが薄汚れた田舎の鍛冶屋さんのお雰囲気にもマッチしたものだと思います。

徳本：わかりますね。教員はきれいに洗って片づけるように指導していましたが、それぞれ子どもによって事情がある話ですから。

卒業生：絵には子どもの生活や背景が見えてくるので、理解の手掛かりにしようとしています、主題を

工夫しないと、手がかりもつかめないと気づきました。教員にそれぞれの子どもが見えるかどうかですけど、これも課題ですね。

徳本：ある卒業生は、年配の教員たちから誤解されている子どもを理解するために「下校指導」と銘打っているいろいろな会話し、理解を深めたと言っていました。

卒業生：大事な工夫です、倣いたいですね。

## 11. 病気体験

徳本：病気がその後の生活に影響していましたが、いつから意識されなくなったのですか。私も小学高学年の頃、よく風邪をひいていました。また、中3時1ヶ月間入院。高校卒業まで尾を引きました。乾布摩擦とか、玄米食とか自分なりに健康増進には努めましたか。

名塚：1972年、東洋工業（現マツダ）に入社してからです。子どももでき、クヨクヨ考えても仕方がないと踏ん切りがつかしました。30歳でした。

徳本：あの時代の結核ですから、今のレベルではないですね。回復されたおかげでお会いできた。高校の修学旅行バスの件。私もです。長じて、新聞配達などバイトという手があったなとも思いました。小学生時代の空き缶拾いは全く金になりませんでした。甘ちゃんだったという自己発見にはなりました。

名塚：私らの中・高校時代、アルバイトはありませんでした。大人の職もなし、離島だったのでなおさら。昭和20年代半ば、国の救済事業「ニコヨン」、日給240円の時代だったと思います。

徳本：確かにそうですね。離島ゆえのハンデ。

## 12. 組合活動

徳本：組合活動の記録は、昨年座談会時よりも詳細。貴重な記録になりました。人生を形作るのは生活と仕事、余暇。

名塚：生活（家庭）、仕事、余暇。その通りです。

徳本：団体交渉の際に発言できなかった悔しさがあるの後の学びの原動力になっていて、倣いたいですね。悔しさはバネになり得る。私の場合は劣等感でしたが。責任転嫁や自己卑下にはならなかったのは、懸命に働く両親の姿と、いろいろと助けて下さった近隣の方々のおかげです。

名塚：そうです。学習していないと自分の発言に自信を持ってません。

徳本：スト中の応援、広電の組合さんの影響もあったのでしょうか。数年前でしたか、広電労組は正規と非正規の待遇を同じにした優れた労組です。公共交通機関の安全・安心は職場における民主主義あってこそという見本です。利用者も安心です。感謝されることを錦の御旗として待遇の改善に努めない介護や保育等のケアリング業界・政治は見倣うべきでしょう。

名塚：当時も、特に広電労組さんには力を頂いたです。

徳本：給料の額をよく覚えておられます。切迫感が伝

りました。

名塚：額が少なかつたから覚えやすかつたのです。

### 13. 労音のこと

卒業生：労音は面白そうですね。親子劇場も同じ趣旨の活動ですね。映画サークルも。

徳本：労音は8歳年下の私たちの同時代の文化ですね。芸術文化活動と民主主義とが繋がっていた。企画・運営・財政とすべて参加市民の手による活動。懐かしい。

名塚：当時の生活の一部でした。

徳本：1966～68年、あの頃が一番よかった、とのこと。恋愛・新婚時代ですね。私は楽天的なのか、強情なのか、今が一番です。歳と共に知力・体力・気力は低下していますけれども、それはそれで。「現在を最もよく生きる」(厚生労働省「保育所保育指針」)を心してきました。

卒業生：私はまだ30年。あのころが一番、というようなことは考えてなかつたですけど。走り続けているからでしょう。

名塚：さっきも言いましたが、来年は80歳。同級生、同年齢の有名人が次々と亡くなる。基町に3年先か、サッカー場ができる。観に行けるだろうか、と。せいぜい2、3年先までしか想像できない。5、10年先となると全く見えてこない。だから今を大切に生きています。

徳本：名言ですね。天与え、天取り給う命。最も大事にされる価値観なんです

名塚：子や孫に負を残さない、の一心でしたから。

卒業生：だから「今を大切に」。「現在を最もよく生きる」そのもの。私もそのような心境でやっていきたい。考えさせられます。

### 14. 組織改革

徳本：昼休み会議の廃止提案は、他の同僚から拍手喝采？同僚の思いを踏まえた上での提案。同僚にとっては本当に有難い存在だったはず。名塚さんに続く人が出ると理想的なのですが。いかがでしたか。

名塚：私自身もそうだったので。同僚の想いも多少はあったと思いますが、自身の想いからの発言でした。さすがに直接の拍手喝采はありませんでしたが、それとなく好意をもってくれる人はいました。その中の一人とは今でも賀状のやり取りはしています。続く人はいませんでしたが。

徳本：発言することは勇気がある。会社や組織の改革提案等、建設的な姿勢は組合活動の成果ですか。

名塚：マツダ入社後はしていません。同盟系でしたので。各種提案、発表等は仕事を通してなので以前の組合活動の成果とは言えません。

徳本：組織や個人をよくしたいという思いがいろいろな創意工夫を生んだという意味では、立派な成果だと思います。他に、いろいろな場面で、決断が即決のことが多い。ご自分を生きておられるからこそではない

かと。中学卒業時の就職希望などは、家庭の事情を付度して。本来の意味での付度ですが。お父さんの意向を読み取っておられた？あのまま就職だったとしたら、どのような名塚さんだったでしょうか。お会いできなかったでしょうが。

名塚：中学卒業後就職していたら、名陶工・匠になっていたかも？

徳本：塗装のプロでしたから。

卒業生：決断、私は優柔不断で先延ばしをすることが多くて、却って大変です。日頃から自分の意思を持つことから始めます。でも、忙しいとじっくり考えることが出来ないので結論を延ばすことになるのですが。

名塚：性格がそうだったからかも。右、左を、どちらかの道を、真ん中の道を考え、行動するのが苦手だったです。

徳本：決断力はどうやって身に付けられたのでしょうか。大阪転勤を断り、退職という決断も。「敗北」。潔い総括ですね。そこからまた力をつけて行かれる。転んでもただでは起きない。

名塚：今（現在）とこの先（未来）を対比し、よい方を取ります。単刀直入？性格でしょうか。

徳本：仕事の創意工夫。子ども時代から培われてきた力の発揮。全能か、無能かという、オール・オア・ナッシング思考ではない。自分を生きるから体得できる力だと思います。

名塚：子ども時代の山野で遊んだ経験もあると思います。

### 15. 文教時代

卒業生：文教の生徒や学生の支えになって頂き、有難うございます。

徳本：私からもお礼を。私は別途、天草産の柑橘類の差し入れも多々。車免許更新時には便乗させて頂きましたし。公ではともかく、私では特段の便宜。助かりました。

名塚：私こそ、仕事を通して文教の生徒さん、学生さんに多くのことを学びました。各種行事でのチームワーク、部活での一生懸命さ。また徳本先生には特に公開講座、ホロコースト記念館への同行、夜間帰宅時の立ち話授業等、人生で一番勉強させてもらいました。

徳本：こちらこそお世話になりました。自分史は皆が書くべき作業だと思いました。遺言にもなる。私が尊敬している教育哲学者、故大田堯さんは、ちょうど100歳の時に『100歳の遺言』（生命誌研究家中村桂子との対談、藤原書店、2018年）を書かれましたが、名塚さんの自分史、ご家族の感想を聞いてみたいです。

卒業生：私も、もう少し自覚しながら生活をしていこうと思いました。確かな自分史を書くには、それなりの人生でなければ、と。

名塚：出来上がったら子・孫に見せます。私なんか書くつもりもなく生きてきたので良い生活ではありません

んでした。計画され、自覚されながら日々生活されたら良い人生を歩むことができるのではないですか。

徳本：懸命さが伝わってきます。個人的に「通信」を書くほか、本誌にも雑文を書いています、流されると書けなくなるので、自分の現在を確認する作業になっています。書きたいことが溜まってくると一気に。手書きが基本なので、その時々、思いが文字に現れていて面白い。名塚さんの手稿は感情の起伏が少ない。

名塚：そうですね、流されると見えなくなる。

卒業生：同調圧力ですね。深刻な問題です。それでも、若い人には新しい文化が育っているのは新鮮です。一回り違うと新しいですね。

徳本：スケボー等の若者たちですね。より高度な技を目指す仲間としての意識。競争ではなく、それぞれの自己表現。見倣いたい。競争文化を生きてきた私たちとは違った文化の担い手。Z世代故なのか。個人の経験が即座に仲間と共有され得る情報環境が生み出した。悪用する人たちに凌駕、駆逐する次元まで至れば状況は改善されるのではないかと。私の東京オリ・パラでの収穫でした。

名塚：私は、東京オリ・パラは観ていません。見る気になれなかった。あ、それでも野球だけは観ました。

徳本：カープの3人が活躍。私はラジオで終盤だけ。

卒業生：栗林が大活躍。

名塚：でしたね。

徳本：話が飛びましたね。ジャンプ？（笑い）ところで、かつての同僚への思いは共感しました。私も同じ思いを持っていましたから。4人は夜の住人。それでも10時前後には退出していました。佐伯さんと私は遅くなる時は電話連絡を欠かしていませんでしたが。ところで自分の所を入力するのは大変でした。数回、入力した箇所が消えて。何かの力が働いているのではないかと。私が改ざんしたのではないと、名塚さんには証言して頂かないと（笑い）。原本はあるので大丈夫ですが。

名塚：（笑い）。退出が遅くなる時は、事前連絡は大変ありがたかったです。

徳本：こちらこそ。お世話になりました。

## 16. フェミニスト

卒業生：奥様、博子さんへの思いは熱いですね。奥様、幸せですね。

徳本：「女性蔑視発言」の森喜朗さんは83歳。名塚さん、79歳。ほぼ同世代なのに。夫婦関係の違いなんですか。フェミニストを生きる男性の一人。倣います。きょうだい効果ですか。「七人の侍」の一人だった女性効果？あるいはお父様の反面教師？

名塚：反面教師ですね。父のようにはなるまいと。

徳本：反面教師は憧れ方式とは違ってさらに馬力が必要。意地が原動力である分、強い。でも、さっき

も言いましたが、お父さんも犠牲者の部分も。騙されたことの責任という面も。複雑です。私たちが課題とするしかないことですね。だから反面教師として超えていくしかない。

卒業生：家事や育児は積極的に共同方式で、ですか？

名塚：子どもが小さい時は専業主婦でしたので積極的には行っていません。現在はゴミ出し、町内会清掃、自治会行事他、いろいろやっています。

卒業生：発見もいろいろと。

名塚：ゴミの分別が大変です。その時々、時世で分別が変わる。これでは高齢者のごみ屋敷が出現する原因の一端？

徳本：発見は次々に。創意工夫も。

## 17. 「自分史」続編へ

徳本：昨年の「座談会」とは別の迫力です。本学勤務時代に出会えたことは私にも有難いことでした。社会への向き合い方の背景・原型の一端を再確認できました。読者とも共有できるものと思います。それでも激震が走る政局。「自分史」作成後、昨今の社会・世界情勢にはいろいろ感じておられるでしょう。健康長寿を保てば虚偽が暴かれ、自ら墓穴を掘るという事例の目撃者になれる。よりましな民主主義の世界を生み出す一人となり続けたいです。お互いに。若い人の足を引っ張らないように自制します。全ての者は「歴史法廷の被告」ですから。

卒業生：私はお二人の背中をしっかりと見ます。

名塚：また、ゆっくり話したいですね。若い人の声も励みになります。

徳本：やせ細る背中を、特に、もっとご覧下さい。『100歳の遺言』を共にめざしましょう。読者各位の感想も聞いてみたいですね。

名塚：子や孫の感想は、また、別の機会に。

徳本：名塚効果です、私も自分史の一端を語ることに。なったようです。年齢が近いからでしょうね。節目節目でメモしておきます。

卒業生：私は希望を持って仕事を続けます。投稿するように努力します、口約束ですけれど。

徳本：口約束でも契約は成立ですよ（笑い）。

## おわりに——声から多声へ——

自分史は自慢史ではない。自虐史でもない。自己を歴史の中で対象化しながら自省と展望を綴る作業である。対象化された多数の声上げは世界を多様に描き出す。多声は多様な応答を生む。結果として社会はよりしなやかに、生きやすくなる。地べたを生きる者こそ、声上げを。

竹林のごとく風雪に耐えるしなやかさは節目節目の総括を必要とする。時務を果たすことが「応答する身体」を生きることになる。「人たることの深遠な意味



に到達す」(色川大吉) べく人生の先達に倣って歩み続けたい。(2021.10.17)

付記：まずはお礼とお願いと。一定の節目での作業はそれ以後の生活に活力をもたらす。定年退職年の2015年秋に「応答する身体」と題する蕪雑な報告を為した私も、退職後の日々に活力を得られている。名塚効果である。名塚会員は入会2年目。新風を吹き込んで下さっている。引き続き投稿最年長記録の連続更新を。私自身も、自分史のメモを作成し続けたい。

教育学教授の上間陽子は困難を生きる沖縄の若者へのインタビューに際して、聞く項目は頭に入れたうえで言葉にならない部分を聞き取ろう、感じ取ろうとする(『海をあげる』(筑摩書房、2020)。私に上間ほどのセンスがあれば、さらに深いところを聞くことが出来たかもしれない。リアル聞き書きではなく、文字方式であったため、私の未熟さは露呈しなかった。読者各位には忌憚のないご意見やご批判を賜りたい。

名塚会員には本学勤務時代に、私を含む本学教員・学生による研究室・教室の消灯忘れ、教室の窓開けっぱなし、等々でいろいろと無用・過度なご負担をおかけした。各自のほんの少しの気遣いで防げることばかり。失礼なことであった。午前零時、時には午前2時になっても連絡せず、そのまま退去した教員の例も何人かあった。電話1本で済む話。早朝から仕事をすれば済む話。なのだが、それができない、しない。そのようなことは文字化されない。立派な方である。かつて、繁華街のビルのガードマンで生活費を稼いできた私には、ひとごとではなかった。仮に同様の経験がなくとも、想像力で補うのが社会的動物である人間の業であろう。最近、強調されているエンパシーの欠如だろうか。「育心育人」という本学教育方針への高い評価者でもある。高い評価を頂いた分、平生の言動には心ばえを効かせたい。

自戒を込めて記す。現場のエッセンシャルワーカーに過度の負担を強いる教員・学生の「業績」とはいかなるものだろうか。現場に無用な負担をかけることになんの痛痒も感じないのは「赤木ファイル」の発端となった安倍晋三前首相も同様である。辺野古の海の埋め立ての強行。DV そのもの。海の生き物へのエンパシーを欠くトップたち。上間は言う。「海をあげる」と。彼らはどんな顔をして海をもらうのだろうか。一人ひとりの足元の不心得が国家の崩壊を招く。なお、私の場合は業務日誌に記載し、担当者経由で注意してもらっていたので基本業務だけで終わる日が多かった。本学の場合はどうだったのだろうか。現場の働き方が改善されたのかどうか。守備範囲のこととして業務日誌には特記されなかったのだろうか。仮にそうであったとすれば、現場に甘えることは恥すべきこと、と諫める者が必要となる。学生・同僚への声かけは折に触れて行っていた私は、一度だけ、その役を担った

ことがある。(2021.9.10/10.18)

追記：昨年は本学会誌が学外会員宛てに届いたのが12月中旬。コロナ禍故とはいえ、極めて遅かった。幸い、本年配布は9月初旬。それでも「遅い」と学外会員の私は思う。かくして今号掲載の「座談会」を読む機会が9月初旬時点で「はぐくみ」学生には得られたことと思う。「座談会」での名塚会員の名言の数々。学生からの応答があれば、次の座談会が生まれる。名塚会員の名言もさらに展開されるだろう。学生には次号で名塚会員の自分史を一読することもできる。名塚発言の背景がさらに見えてくれると思われる(別途、感想でも頂ければ、本原稿の複写をお届けすることもできる)。共著の教員には3月26日発行直後に届いている。現時点では個人的な応答はないが、あれば、さらに学びあいを展開できる。ともに楽しみである。

事実として、本学卒業時点で「10年会員」希望学生は7割弱(2019年度)。ここ数年の傾向。卒業生数が学外会員数と同数ではない。本学会創設の趣旨からは検討すべき事態である。他の学会同様、単年度納入方式を是とする卒業生が増えたのか。あるいは在学中に学会の質量を吟味した結果の判断なのか。卒業後は自由意志である。学会誌の出来ばえで当該年度会費を納入する判断に至った卒業生が出てきたのだろうか。仮にそうなら、賢明な消費者の誕生である。学会運営委員はもとより、現役教職員はそのような学生会員の思いをどこまで感知しておられるのか。対策はいかに。今崎学会長の熱い発信を引き続き期待している。

退職教員の私が言えることは一つ。賢明な卒業生として学会活動に積極的に参画して学会の充実を目指されたい。単年度会員・10年会員ともに、である。投稿は最も簡単な手段であろう。複数の会員による感想を束ねたものでも十分である。発信に個人的に応答するもよし。しかし、学会誌は会員の研究・実践の交流の場である。学会誌上でのやりとりが輪を広げ、深める。運よく直接の応答が実現しても、公開しなければ広がりや深まりは生まれない。指針は眼前にある。名塚会員は教育・保育の専門ではない。79歳。希望して会員になられたので当然とはいえ、発信中。本学会の活性化という名塚効果である。改めて感謝したい。現役の学生会員には無論、学外会員各位には、小文がその志をお届けすることになる。むろん、ご本人は私と違って謙虚な方ですけれど。退職教員の私ができることは一つ。私なりに質の高い報告を届けること。久々に159頁。ここ数年のほぼ倍増。嬉しい驚嘆であろう。量は質に転化する。非会員卒業生に対して、この喜ぶべき事実を拡散されたい。ゼミ生2名と名塚会員には感謝したい。私自身は専門を異にする名塚会員の鋭さから学び続けている。職業人として40年近く学校空間を生きてきた者として他業種の人びととの関わりは、買ってでも得るべきことであった。一時期、勤務先を共有できたことは私の幸せであった。

新たに知り得た社会人に本学の宣伝を兼ねて本学会のことを紹介しているが、現時点では敷居が高いようである。現役時代に複数の本学事務職員に執筆を勧めたこともあったが、私の力量不足で実現しなかった。それだけ多忙であったということだろう。まずは、会員登録。希望は捨ててはいない。本学附属高校・幼稚園の教職員各位に会員登録を推奨してはどうだろうか。それぞれ研究紀要がある(?)ので不要なのか。学会趣旨賛同者が若干名であれ、毎年入会されるような学会を模索したい。生成発展する学会の姿であり、本学部の今後をより確かなものにする。

以下は余談だが、明記しておく。10年会費会員への責任についての現役時代の私の決意である。前納方式が「ほったくり」と揶揄されないためにも、会費分の責任を果たそうと投稿に努めた。2015年度定年退職ゆえ、2025年度までは投稿に励みたい。国家的に言えば、納税義務だけ課して納税者が困難な状況に陥ったら「自助・共助・公助、そして絆」と。これは「ほったくり」そのもの。私憤を公憤に。(2021.9.10/10.17)  
補記：本学の教養科目「人生論」は、各界の講師が自らの人生の一端を語る目玉授業の一つであった。創設期、担当者の一人として関わった私は、その後も退職年まで学生と共に聴講した。学生と共に感想を書いた。学生と共に質問もした。より多くの多種多様な人との出会いを若い時期から持つことは、生き方の幅を広げ、深める契機になる。本学会員には職種の違った会員の発信と出会うことによって、誌上版人生論ともなりうるのではないかと。小文が契機となって本学科退職教職員による自分史寄稿の機運が高まることを願っている。縁あって集えた学会員である。音声自動変換ソフトの機能が格段に向上しているという。パソコン入力時間と労力の節減になろう。最後の決め手は何を語るか、質の問題である。遺言の質でもある。人生をどう生きてきたか。人生の対象化作業の質でもある。

健康の秘訣の一つが後なるものへの絶えざる発信である。広義の後継者養成に自覚的になればなるほど、現在進行形のことさらに無関心ではいられないはずである。流され人生や無関心人生では、後なる者への顔向けはできない。人に限らず、生態系への責任である。SDGs活動への参画でもある。前回「大学教育考」が為った理由である。第二次安倍自公政権時代の2015年9月19日に強行採決・成立した略称「安全保障法制」の論議が展開されていた時期、当時の1年次生の有志が「選挙に行こう」と呼びかけた。座談会の私たちも思いは共通だった。彼女たちのその後の報告に名塚会員は誠実に応答された。現役時代に生徒・学生に誠実に対応されたように。そのために入会された。平生の他者への誠実さは政治の無理無体への抗いを生み、抗う若者への連帯の意思表示となる。むべなるかな。做りたい。教職が矯飾に墮さないためにも誠実さは不可欠である。本学創設者武田ミキの座右の銘が

「誠」であった。誠を生き抜いた創設者の遺訓である。

当然ながら日本語の破壊や冒涇に対しても厳しい。日本語教育関係教員はむろん、日本語で教育を担当する教員は日本語を大事にする見本を示す責務がある。マスメディアを通じて流される「お粗末な」発信に抗するには言葉を奉るような日本語によるねんごろな発信が不可欠である。原稿の棒読みでなく自らの言葉で語る。言葉の熱量である。自戒を込めて記す。

小文の性格として、現在進行形の時事問題への言及は避けては通れない。9月4日菅義偉首相が「コロナ対策に専念する」と、総裁選挙立候補を断念した。(「コロナ対策に専念する」ことが首相続投戦略ほどには強固でなかったがゆえなのだ。) 自利のための政策は政策ではない。事理に適った政策が本筋である。本人は無自覚なのか。このような言葉への冒涇がまかり通るのが昨今の日本である。9年間の安倍・菅政権時代の悪しき、唾棄すべき遺産である。

本来、リーダーは本人が希望するのではない。周りの評価・推挙が結果として生む地位である。強い自薦意識が確かなリーダーと見なされる。党国会議員は勝ち馬に我先に乗り、選挙に不利と見るや離れる。両首相には逆命利君の家臣が不在であった。首相の人事政策の当然の帰結である。策に溺れた。自由・平等・公正といった人類普遍的価値観を共有する生き方からは身内を「イエスパーソン」で固める策は生まれない。元来、1955年体制以後の自民党長期政権の遺産である原発の3.11過酷事故。対応の不備を非難した当時の野党自民党が与党としてコロナ対策で十全な対策を取り得ていない。逆に後継総裁協議で活発に活動している。その活動と国民の安全保障実現のための活動との比重はいかに。

貴重な紙面にこのような低次元なことがらを記す。哀しむべきことだが、記録して記憶しない限りは、悪弊は何度も繰り返される。伊丹万作が嘆いたように。これほど無様な姿を見せられた有権者がどう反応するか。結末は秋の選挙。改めて補足することとなろう。民主主義を破壊した政治家の顛末を知るまでは長生きしたい。生への執念である。

現下の新型コロナウイルスのパンデミック以上に人類全体の存続を左右する気候変動危機への対応も待ったなしである。高次元での政策を立案・実行する民主主義の成熟度の問題である。優れた指針であった那須正幹・内橋克人・色川大吉を喪う。大損失である。彼らの分も見届けたい。合掌。(2021.9.14/10.17)

追記：以下は、私信の一部。「高い消費者意識を」「返却不能な高額商品」としての議員。国会議員報酬3000万円。その他の議員への処遇は多々。費用対効果の観点から評価するにしても、評価項目は一律ではない。選挙前だけでなく、適宜、公開質問状を提示するという方式で有権者が監視しているという雰囲気どこまで醸し出すことができるか。

当選者は1票差でも当選する。であれば、熾烈な競争に励むのは当然。その競争の勝者を生み出す側になるのかどうか。有権者の選択である。最優先の選択基準は何か。常に動向調査と分析がなされている。選挙の時期、公約等、ここから生まれる。ジャーナリストで、衆議院議員も歴任した井戸まさえ『ドキュメント候補者たちの闘争—選挙とカネと政党』（岩波書店、2018年）は、赤裸々な裏事情を明かす。候補者、あるいは議員の素顔が見えてくる。自身の子どもの無戸籍の問題を契機にこの問題を解明してきた井戸にしても、国政に復帰できていない。今回も落選。日本社会からすれば損失だと私は思うが。その損失をだれが補填してくれるのだろうか。選挙区民は、結果として井戸ではない人を当選させた。

私は、今回の投票率を希望をもって60%と読んでいた。ことによると65%近くもありか、とも。全くの認識不足。結果は55.93%。過去ワースト3。棄権者44%強はなにゆえに。低投票率という実態から選挙の本質はどこまで明らかになるのだろうか。消去法という生き方は日常生活では当然のこと。有限の範囲内での最善の選択。伴侶についても、同様？ 消去法という言葉が嫌いなら有限の条件の中での最善という意味である。「投票したい候補者がいない」という理由での棄権。そもそも選挙における切実感が不足か。せめて選挙に関しては、最高の候補者に投票したいということか。不明。

投票開票当日。NHK開票速報。翌日1時過ぎまで。途中から民法ラジオで聞く。TBS東京ラジオ。初めて。低投票率、「市民連合」の思いが期待ほどには伸びなかったこと、経済に関する質問には滔々と答える著名政治家がジェンダー等の質問に関しては歯切れが悪いという実態を再確認するなど、寝つきが悪かった。朝の目覚めに異変。めまい。何とか自家用車で病院へ。点滴を打つ始末。原因は不明。衝撃が身体にまで及んだということだとすれば、私以上に身体的に異変を起こしている人々もいるだろうと、お見舞いの思い。例えば、井戸候補。捲土重来を、と。

選挙本を読む。アダム・プシェヴォスキ、粕谷祐子・山田安珠訳『それでも選挙に行く理由』（白水社、2021年）。様々な国の過去200年にわたる例からの分析に基づき、選挙の本質が語られる。端的には「結局、民主主義の奇跡とは、対立する政治勢力が投票結果に従うということである」「いわば、ルールある紛争、すなわち殺戮のない紛争である。投票用紙とは紙でできた「石つぶて」なのである」「投票は「力こぶをつくること」と同じ、つまり、起こりうる戦争の勝率を予測できることに匹敵する」

著者の論述には納得することばかり。だが、即座に疑問がわく。先に述べた、低投票率の場合も当て

はまるのだろうか。投票率のことは著者にはどこまで含意があるのか。「石つぶて」を放棄する人びとは何を以って意思表示をするのか。考えるべきことは次から次へと。問いが新たな問いを生むのが、優れた学びであるとは授業での定番。目下、実感中。

今回の選挙で象徴的だったことの一つは、「市民連合」との約束としての、例えば一連の疑惑の真相解明、学術会議の件、選択的夫婦別姓の件、等々がどこまで選択肢の上位にあったかということ。詳細な分析はされているのだろうが、私は未見。いわゆる「B層」の投票行動は今回は、さらに加速されたのかどうか。「経済」が今回も重視されたというのが大方の要因とその結果。事実としては、9年間の経済政策で巨額の富は得られたのに、それらが大企業や富裕層へは分配され、国民の大多数、とりわけ困難を抱えている層には本来の再分配機能が働いていないが故の現状であるにもかかわらず、である。大企業や富裕層の関係者は、自らに有利になるような政策決定を着々と行ってきている。合法的にであるから違法とはならない。この点是有権者にどこまで理解されていたのだろうか。低所得層をはじめ、大多数派は、この事実が公表されてもさほど怒っているようには見えない。諦めか。いずれ自分もそのような恩恵を受けることを期待しての沈黙か。18歳以下のすべての子どもへの10万円支給公約。税率の逆進性からすれば、10万円は雀の涙。本来はもっと再分配されてしかるべき公費であるのに。現在の社会的地位に満足しきっているのだろうか。

「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として。二度目は喜劇として」。1945年の「敗戦」や2011年の原発の過酷事故。「敗戦」経験者や歴史をしかと学んだ者には、2回も取り返しのつかない失敗から本気で考え直すモードになって当然だが、失敗の記憶を消去する力が働く現実。敗戦を身体感覚的にとらえていない人にとっては、1回目。悲劇の次元の体験。しかし、これとても、震災・津波の結果と捉えることで人為を越えたこととしてスルーすることもできないことではない。痛みとなりにくい。学べない。学ばない。当事者意識をもって生きるとはどういうことか。何をもって判断するのか。「学ぶことは変わること」（林竹二）。学びの不足なのか。（2021.11.11）

「尋ね人」。NHK（ラジオ第一月～土 後4.30～4.35）「終戦直後からつづいた「尋ね人」放送も、36年度が最後の年度となったが、総放送件数は99,500余り、このうち25%が解決した」（『NHK年鑑1962 NO. 2』）。先日亡くなった新井満に『尋ね人の時間』（文藝春秋、1988年）があった。「面白くもなんともないその番組」（204-5頁）と新井。「4歳になるかならないかのころ」父親を病死で喪くしていたための感想だったのだ。（2021.12.12）